

# 1. 着物は日本の文化

きものを着る人は、昔からするとずいぶん少なくなっていますが、私たちの奄美の島々では、今でもまちや村を歩くとはた機をおる音が聞こえてきたりします。

そうです、おおしまつむぎ大島紬おを織る音です。

大島紬は、きものの中でも、とっても高級なものとして全国の多くの人たちに大事にされています。そして、日本を代表するきもののひとつなのです。

お父さん、お母さんや、おじいちゃん、おばあちゃんが持っていたら見せてもらいましょう。



## 2. 大島紬のおこり

奄美の島々は、大和朝廷の時代から琉球王国（今の沖縄県）の統治へと変わり、さらにさつま藩の直轄地となるなど、いろいろな時代をへてきました。

その間、「海上の道の島」として日本本土と、南方や大陸との交易通路として重要な役割を果たしてきました。

そのような中で、南北の文化の影響を受け、大島紬が生まれ、発達してきました。

九州

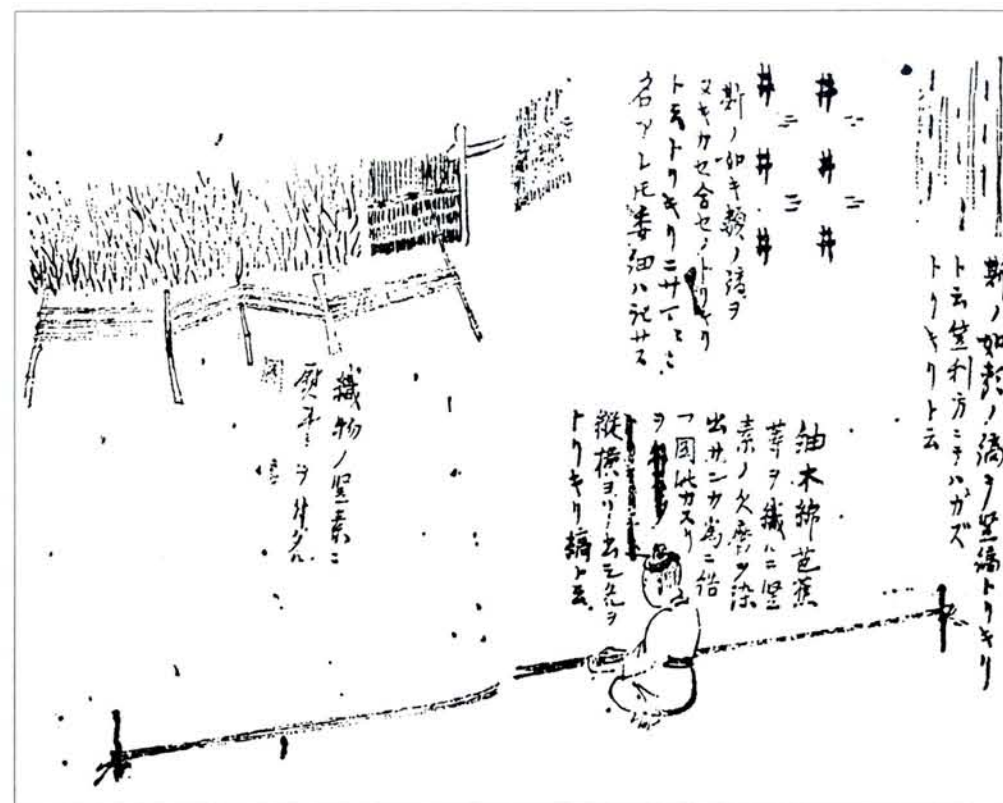
奄美大島

沖縄本島

八重山諸島

中国大陸

台湾



—糸くくり／南島雑話より—

### (1) 大島紬のおこり

奄美大島では、琉球の影響を受けて昔からいろいろな材料で布をつくっていましたが、いつのころからか、つむぎづくりをはじめたそうです。はじめのころは、無地やかんたんなもようのつむぎをつくっていましたが、やがて、島に多いソテツやハブのうろこを参考にして、複雑なもようのつむぎをつくりはじめました。また、島にあるテーチ木（シャリンバイ）や鉄分の多い田の泥で染める方法を発見して大島独特のつむぎをつくりだしました。





このように大島紬は奄美大島の自然を生かして生まれてきました。しかし、こうして生まれた大島紬もさつま藩<sup>はん</sup>に支配されていた時代は、殿さまへのみつぎ物としてだけ作られていたために一般には広まらなかったそうです。



### 3. 大島紬ができるまで

大島紬をつくるには、たいへん多くのことを、順序よくしなければなりません。その中のおもなものだけでも、たくさんの方がいます。それらを順序よく見てみましょう。

#### ①柄の設計

大島紬をつくるには、せつけいず設計図の役割をはたすものがが必要です。まず、柄や色合いの参考にするもの図が必要で、これには専門の人が書いたずあん図案



—もとになる図案—

が多く使われます。たて糸とよこ糸の組合せで織られるので、ななめの線はかけません。織りあがったもようがななめに見えるものでも、よく見ると、たてとよこの交わった点からで

きています。。

がら柄の設計は、もとのずあん図案を見ながら、ほうがんし方眼紙のます目を一つひとついねいに色づけしていきます。



—柄の設計図—

#### ②糸くり

糸の準備をします。材料の絹糸をたばにして、お湯でにた後よくかんそうさせます。この糸を「かせ糸」といいます。かせ糸ができたら、糸くりといって小さなわくにまきとっていきます。糸がもつれないように細かなところまで気をくばります。



—糸くり—

#### ③はえばた (整経)

作品に合わせて、たて糸とよこ糸の長さ、糸の本数 (12本~16本) をそろえます。大島紬はできあがりの長さが12.32メートル以上、はばが34.8セ



—整経—

ンチメートル以上と決められています。長さを正確にとること、柄によって糸の本数がちがうので糸が不足したりしないこと、などに気を付けています。





—のりはり—

#### ④のりはり

しめばたで、かすりもようを作るためには、はえばたでそろえた糸をのりで固めておかななくてはなりません。たて糸とよこ糸をそれぞれまとめて、いぎすやふのりなどをつけ、日光でじゅうぶんにかわかします。その後、室内で10日間ぐらい自然かんそうさせて、糸のちぢみを一定に落ちつかせます。

のりのこさや糸の張りかけんはその日の天候や、風力、いど湿度等に合わせて調節しなくてはならないので、長年の経験とすぐれた技術が必要です。



—のりつけ—

#### ⑤しめばた

かすりのもようを作る作業です。大島つむぎはきめ細かなかすりの美しさが特ちょうですが、そのひみつは、このしめばたでしめる技術にあるといわれています。



—しめ—

図案に合わせながら木綿糸で、絹糸を強くしめていきます。強くしめないときれいなかすりはできません。たいへん力のいる仕事なので、これは男の仕事になっています。しめぐあいは、すべて長い経験できたえた<sup>かん</sup>勘にたよっています。しめぐあいがかたすぎても、やわらかすぎても、染色がうまくいきません。しめられたものを「むしろ」といっています。







—テーチ木をくだく—

## ⑥染める

大島つむぎの最大の特徴は泥<sup>どろ</sup>染めという染め方にあります。染め方は2つの段階に分けられます。まずテーチ木染めです。

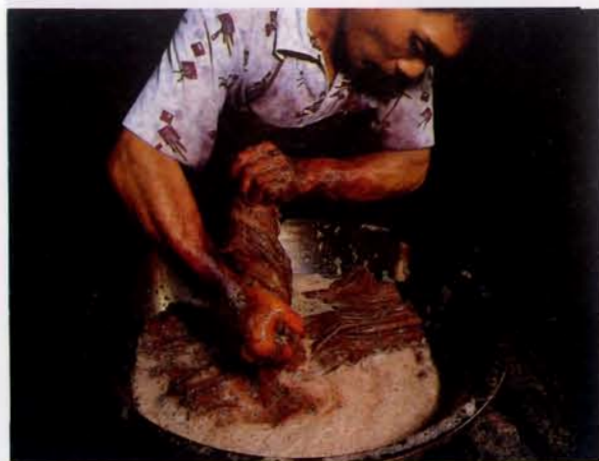
テーチ木というのは奄美の方言で、和名はシャリンバイ（車輪梅）といい、本州から南の地方にはえている木です。これを細かくチップ状にくだいて、大

きなかまで10時間から12時間ぐらい煮て、その煮汁をはちにうつし、絹糸を入れてもみこみます。

大島紬には、かすり糸と地糸の2種類があります。かすり糸は、もようを織りなすため、しめばたで織られて「むしろ」の状態

で染められます。地糸は単色（一色）で、もようの背景となる糸で束ねたまま染め

ます。どちらも20回から60回もテーチ木の煮汁で染められます。そうすると、テーチ木に含まれているタンニンで糸は茶かっ色に染まります。



—テーチ木染め—



—どろ染め—

## ⑦どろ染め

テーチ木で染められた糸やむしろを泥田<sup>どろた</sup>にもって行って、泥田のなかでもみこみます。糸にしみこんでいたテーチ木のタンニン<sup>さん</sup>酸と泥田の鉄分<sup>てつぶん</sup>が反応して黒色に染まります。ただし、どこの泥田でもいいというわけではありません。鉄分を多く含んだ泥田でなければいけないのです。そして、きれいな川で洗い、ふたたび泥田でもみこみます。

これを3回から4回くりかえし、色の染まりぐあいをさらに強くします。こうすることで大島紬<sup>とくゆう</sup>特有の黒色を出すことができます。



### ⑧かすりの「すりこみ染色」

最近では、泥あい染めや化学染料染めによりいろいろな色の大島紬もつくられ、「色大島」といわれています。

「色大島」をつくるには、かすりの部分を化学染料で部分的に色分けして染めます。この作業は、「むしろ」のしめをとく前にします。



—すりこみ染色—

しめばたでしめた部分は、染まらずに白いままの色をしています。染めようとする部分の木綿糸をほどいて、この部分に化学染料をすりこみます。



—かすりむしろとき—

### ⑨「しめ」をとく

すべての染色が終わると、木綿糸を全部といて、長い絹糸だけにして「かすり糸」ができあがります。

### ⑩織るまえの準備

染めが終わって、織りに入る前にも、いろいろな準備が必要です。大島紬の糸には、たて糸・よこ糸それぞれに地糸とかすり糸がありますが、この4種類の糸は織りにかかるまでにちがった加工がされて準備されます。(この工程は、後のページの「大島紬のおもな工程」の図に書いてあります。)



—あげわく—

たて糸は十分気をつけ仕事がされて機にかけられます。よこ糸は、多くの管に巻かれて「杼」(シャトル)におさめられ、織られます。



—おさとおし—

### ⑪はたで織る

大島紬は「高ばた」という手織り用の機で織ります。「杼」を使って7センチメートルほど織ると、たて糸をゆるめて、一本一本ていねいに針でもようを合わせます。



—かすり合わせ—





はたおり

もようを細かいたて糸とよこ糸で正確に合わせるのはたいへんむずかしい仕事ですが、なれた人の指先は手品師のように動いて美しいもようを正確に作りだしていきます。一反の布を織りあげるまでには、もよう合わせを200回近くくり返さなくてはなりません。たいへん根気のいる仕事なのです。一反の反物を織るのにおよそ40日かかります。

まもなく、織りおえるときが近づくと、気持ちがワクワクするような、とっつもしあわせ気分になるそうです。

自分の子供が学校を卒業する時の気持ちにも似ているそうです。

このように、大島紬ができるまでには、たいへん多くのことをしなければなりません。どの技術も、身につけるには大変な努力と年月が必要です。そして、力のいるもの、根気のいるものなど、その苦労も様々ですが、ものを作り上げていく喜びは、かけがえのないものです。

## ⑫検査

織りあげた大島紬は、すべて組合の検査場に持ちこみます。ここでは、よくなれた検査員が、長さ・織りはば・かすりの不ぞろい・色むらなど、20項目もの厳しい検査をして、合格か不合格かを決めます。そして合格したものだけに、一反ごとに、品質を<sup>ひんしつ</sup>保証<sup>ほしょう</sup>する品質表示のマークや<sup>しょうひょう</sup>商標などがつけられます。

奄美産地では「地球印」、鹿児島産地では「旗印」の商標が貼られます。



— 検査 —



— 旗印の商標 —



— 地球印の商標 —



## 4. これからの大島紬

「伝統的工芸品」である大島紬は素晴らしいものですが、さらによい商品を作るためにいろいろな研究が続けられています。



—コンピュータで図案をつくる—

- コンピュータで図案づくりをする。
- 日光に当てても変色しにくい、日光に強い草木染めの開発をする。
- 染め、しめ、織りなどの製造工程の改善をする。
- 大島紬のドレス、洋服地、小物（ネクタイ、テーブルクロス、かべかけ）などの商品開発をする。



—テーチ木染めの自動染色装置—  
(大島紬技術指導センター)

このように、伝統を守りながら、今の時代に合ったいろいろな研究が進められています。

## 5. あとつぎの問題

大島紬のほとんどの工程は、伝統的な技術を持つ職人の手作業によって行なわれています。しかし、職人になるためには、大変な努力と年月が必要です。それに、働く人の平均年齢が高くな

ってきているため、あとつぎの問題を考えなければなりません。そこで、その解決のためには、「伝統的工芸品」である大島紬のよさをより多くの人に理解してもらい、あとつぎを育てることが大切なのです。



—組合の紬学院の織工養成—



—大島紬の泥染めを見学する小学生たち—